ねえ、傘、貸して

児童向け小説集

星野廉

目次

何もかもが輝いて見える日に
＊ 3

ねえ、傘、貸して
＊ 15

九つの命
＊ 25

何もかもが輝いて見える日に

＊

妹の世話。

それだけがカルロスに与えられた責任でした。学校へは行かなくてもいい。妹のマルシアを見守り、一緒におやつを食べ、食事をし、両親の帰りを待つ。カルロスには、その生活に大きな不満はありません。

マルシアはテレビが大好きです。テレビに熱中している間は、カルロスは心配する必要がありません。妹は寝転がったり、上体を起こした格好でクッションを抱きながら、テレビに見入っています。カルロスは、妹の背中に時々目をやるだけで済みます。妹が外に出なければ、それでいいのです。

家にはテレビが二台あります。大きいほうは、マルシアが普通の放送を見ています。小さいほうは、ＤＶＤレコーダーに接続してあります。カルロスはマルシアと背中を向き合って、小さいほうの画面を眺めています。マルシアの立ち上がる気配がするたびに、カルロスは振り返り、妹の様子に気を配ります。

「お兄ちゃん、ちょっと見て。あの遊園地、この町の近くにあるところだよね。また、連れて行ってもらえるかな」

マルシアが母国の言葉で言いました。カルロスが振り向くと、大きな画面にアミューズメントパークの映像が映し出されています。ローカル番組のようです。確かに、数カ月前に両親と一緒に遊びに行った場所に見えます。ジェットコースターに見覚えがあります。マルシアとお母さんはジェットコースターが大好きですが、カルロスとお父さんは苦手です。

そのジェットコースターを背景にして、マイクを手にした二人の女性が何やらしゃべっています。カルロスにはその言葉が分かりません。この国の言葉を話したり、読み

書きすることができないのです。カルロスもマルシアも小学生ですが、お金や言葉の問題があって、この町の小学校に籍はあっても通えないのです。

「本当だ。温泉のある遊園地だ。でも、当分は連れて行ってもらえないだろうな」

「そうだよね。不景気だもんね。世界大不況だもんね」とマルシアは言いました。その後は、母国の言葉からこの国の言葉に切り換えて、テレビに映っている二人の女性に何やら話し掛けています。マルシアは、そんなふうにテレビの前で、早口でひとり言を口にします。この国の言葉なので、カルロスには妹が何を言っているのかさっぱり分かりません。

　マルシアの声がうるさいと思いながらも、カルロスは小さいテレビのほうに向き直り、母国で作られた映画へと視線をもどしました。映画は、母国にある大きな都市に住む貧しい一家の物語です。これまで何度も繰り返して見たものですが、カルロスは見飽きません。

　ちょうどカルロスが好きなシーンが映っています。一家のお父さんが自分の弟と一緒にお酒を飲みながら、外国に出稼ぎに行く相談をしています。二人とも楽しそうに夢を語っています。カルロスは、この映画の科白を全部暗記しています。

「まず新しいテレビを買うだろう、そして次は車だ。車は中古でいい」

「ぼくは車のほうが先だ。新品のほうがいいな。それからギターを買うんだ」

　この場面では、カルロスは映画の登場人物と同時に科白をささやきます。カルロスもギターが欲しいのです。

＊

　正午の少し前に、フジタさんが訪ねて来ました。

「間に合ってよかった。あなたたち、お昼はまだでしょ。お母さんは、きょうは何を置いていったの？」とフジタさんが、カルロスたちの母国の言葉で言いました。

「ご飯と、きのうの夕飯の残りのシチュー」と、マルシアが答えます。

「そう。じゃあ、シチューを先に食べなさい。これは冷蔵庫に入れておけば大丈夫だから、明日のお昼にでも召し上がれ」

　フジタさんは、大きな紙袋から密閉式のプラスチック容器を取り出し、カルロスに手渡しました。フジタさんが手に持っている紙袋の底に、同じ容器が三個見えます。フジタさんは、カルロスたちのように、家にいる外国籍の子どもたちのいる家庭を回っています。

　週に何度か訪ねて来て、昼食を配ったり様子を見てくれます。服を持って来てくれることもあります。カルロスが聞いた話では、ボランティアのグループを作っていて、そのリーダーをしているとのことです。

「ありがとうございます」

　カルロスは容器を手にしたまま、頭を下げて礼を言いました。容器から漏れる匂いから、中身は野菜と牛肉を煮たものだと分かります。カルロスもマルシアも大好きな料理です。

「フジタさん、ありがとう。お母さんが許してくれたら、明日じゃなくて夕飯に食べてもいい？」

「もちろん、どうぞご自由に」

　そのあと、フジタさんとマルシアは、この国の言葉で話し始めました。カルロスは容器を持ってキッチンに入りました。いい匂いを嗅いだせいか、冷蔵庫を開けたとたんに、お腹が鳴りました。玄関のドアが閉まる音がしました。カルロスは耳を澄ます。ドアの錠がかかり、ドアチェーンがガチャガチャいうのを聞き届けました。

　マルシアがキッチンに現れ、カルロスに向かって何か言いました。マルシアはカルロスに、うっかりとこの国の言葉で話し掛けることが時々あります。カルロスは、両手を開いて肩の上まで上げ、「分かんないよ」という意味の仕草をしました。

＊

立体駐車場に面したコンビニの前に近づいて行くにつれて、マルシアの足どりが重くなるのをカルロスは感じました。妹には、自分たちがコンビニの中には入らないことが分かっています。妹はゆっくりと足を運んでいます。コンビニに興味を持っているのが伝わってきます。マルシアの足が止まりました。

カルロスも中に入ってみたいのですが、陳列されたいろいろな商品が欲しくなり、みじめな思いをするだけだというのが分かっています。店の人たちも、親と一緒ではなくカルロスたちだけが店内に入るといい顔をしません。店を被うガラスに映っている自分たち二人の姿を、カルロスはしばらく見ていました。

「マルシア――」と、背後から声がしました。カルロスも知っている、近所に住む女性です。妹の名前だけは聞きとれましたが、あとは何をしゃべっているのか、カルロスには分かりません。マルシアはその女性を見るなり腰の辺りに抱きつき、二人は会話を始めました。

マルシアは人見知りをしません。男性女性、大人子どもの区別なく、近所の誰とも口を利きます。猫や犬にも声を掛けます。初対面の人とも平気で話します。

「マルシアは誰とでも話す子だから、ちゃんと気をつけて見てあげてね」と、カルロスは両親からしょっちゅう言われています。

妹には話している相手をなごませる力が備わっているようだ。そうカルロスは思うことがあります。この国の言葉に不自由している様子は全く見られません。カルロスには、それが不思議で仕方ありません。うらやましく思うこともあります。

「コンビニは高いから、向こうのスーパーでおやつを買ってくれるって」

近所の女性と話していたマルシアが言いました。こうした状況に慣れっこになっているカルロスは、その女性に軽く頭を下げて、おしゃべりを続けている二人の後をついて行きます。

＊

ある日。

工場で働くお父さんが大けがをしました。お母さんが別の工場で働いているので、カルロスとマルシアが病院で付き添うことになりました。二人は年の割には体が大きいほうです。カルロスは小学校高学年、マルシアは小学校三、四年生の児童に見えます。特にマルシアはこの国の言葉がよく話せるために、一家の通訳兼保護者のような役目をすることがあります。

いくら言葉をうまく話せても、この国の複雑な文字だけは、マルシアには歯が立ちません。話によると、文字の種類がいくつかあるだけでなく、そのうちの一種類には何千もの数があるというのです。マルシアはこの国の文字が分からなくても、話すだけなら難しい言葉も知っているようです。母国の言葉でも、妹のほうがたくさんの単語を知っています。

お父さんが入院することになったときには、書類を前にしてペンを持つ病院の職員や医師や看護師の横にマルシアがついていました。そして、お父さんやカルロスの代わりに次々と質問に答え、手続きを進める手伝いをこなしました。

お父さんは五人部屋に入りました。マルシアはこまめに部屋の男性たちのベッドを回ります。中には無愛想な人もいますが、気にせずに話し掛けたり、ちょっとした手伝いをします。やがて、ほかの病室や院内のいろいろな場所にも顔を出すようになりました。

「マルシアちゃんが来て、この部屋に花が咲いた」

「院内全体がぱっと明るくなった気がする」

「この患者さん、マルシアちゃんが一緒にいれば、ちゃんとご飯を食べてくれるのよ」

そんな言葉が患者やその付き添いの人たちからも、そして病院で働く人たちからも聞かれるようになりました。カルロスは、他人にそんな気持ちをいだかせる妹を誇らしく思いました。

大きな怪我をしたお父さんは内臓にも病気があると診断され、長期の入院が必要だとお医者さんから告げられました。

お父さんは高熱にうなされるようになりました。薬の入った点滴を受けて症状がいくぶんか治まると、ベッド脇の椅子に腰掛けたカルロスに向かって、母国の言葉で自分の子ども時代の話をしてくれます。声は弱々しいです。カルロスはお父さんの聞き役になろうと、一生懸命に耳を傾けます。

お父さんの話はよく飛びます。

最初のうちは、子どもだったころのいろいろな思い出がほとんどでした。川での釣り、木登り、農場での手伝い、いたずらをして叱られたこと、家で飼われていた家畜の出産、初めて海を見た時の驚き――カルロスにとっては、初めて聞く珍しい話ばかりでした。

そのうち、お父さんのお祖父ちゃん、つまりカルロスにとっては曾じいさんに当たる人が、よく語ってくれたという話をするようになりました。

――生きていると、苦しいことや、悲しいことがたくさんある。痛い目や、つらい目にも何度かあう。しかし、それが生きているという証しなのだから、受け入れるほかない。毎日、働けるだけで、人は感謝しなければならない。働ける土地があり、土地にまく種があり、土地に雨が降り、種から芽が出る。それだけでも、奇跡なのだ。畑に水を運び、手入れをし、その日のご褒美として食べ物を口にし、飲み物で渇きを癒やす。それだけでも、奇跡なのだ。奇跡はすべての物に宿っている。生きた物にも、生きているようには見えない物にも。

――時には歌をうたって天と地をたたえ、生き物やいろいろな物たちの声に耳を澄まし、作物が育つことを祈る。そうすれば、やがて実りの時期がやってくる。もちろん、嵐もあれば、天から氷のかけらが降ることもある。日照りの日ばかりが続くこともある。育てている作物が、病で枯れることもある。すべては、天と地が何かを知らせるためにしていることだ。だから、人はその何かを知る努力をしなければならない。だが、その何かは、結局は分からない。知る努力をすることだけが大切なのかもしれない。

――神父様は天と地が知らせているその何かが分かると言うが、わたしには、その何かは分からない。わたしは、神父様よりもガテ様のほうが偉いと思う。ガテ様は分からないことは分からないとおっしゃる。分かる必要もないとおっしゃる。わたしには、ガテ様のほうが正直に思える。

　そんなふうに、お父さんは、お父さんのお祖父ちゃんの言葉を伝えます。いつの間にか、カルロスは、お父さんがその「お祖父ちゃん」になって、自分に語り掛けているような気持ちがしてきました。

　ガテ様って何だろう。神父様に分かって、ガテ様には分からないことって、何なのだろう。分からなくてもいいのは、なぜなのだろう。カルロスは何度か、お父さんに尋ねようとしましたが、お父さんの病状が良くないことを思うと、声が出ません。お父さんの声は、日増しに弱々しく小さくなってきています。

　点滴を受けて少し元気が出ると、お父さんは、カルロスに母国の言葉でお父さんのお祖父ちゃんの話を繰り返します。

「ガテ様って何なの？」

　お父さんが元気そうな時に、カルロスは聞いてみました。

「わたしのじいちゃんの話だと、ガテ様は、よそ者の神父様や、神父様の言う神様よりも、ずっと前からうちの土地にいるそうだ。いつもわたしたちを守り、そして叱ってくださる」

「じゃあ、この国にはいないの？」

「いや。遠くから見ていてくださる。最近は、この近くにも来ていらっしゃる気がしてならない」

「お父さんの話、分かんない」と、カルロスは正直に言いました。

＊

マルシアは、お父さんの話には関心を示しません。看護師や医師や病院で働いている人たち、そして患者さんたちのアイドルのような存在になっています。その様子を見ていて、きっと妹には人びとを癒やすという使命があるのだ。そのように、カルロスは思うようになりました。

今では、お父さんの話は十分くらいで終わります。後はこんこんと眠るだけになりました。五人部屋にいるほかの患者たちは、言葉の通じない人ばかりです。備え付けのテレビも、言葉が分からないのでおもしろくありません。

「これ、プレゼント。分かる？　プ・レ・ゼ・ン・ト」

ある日、カルロスは、同じ病室にいる退院間近の若い男の人から小型のラジオをもらいました。

この地方には、カルロスの一家と同じ国の人たちがたくさん働いています。ラジオのつまみをある目盛りに合わせると、カルロスが小さかったころに聞いた懐かしい歌や、母国の言葉の情報番組や、ニュースが聞けます。カルロスが大好きな、ギターを使った母国の曲も流れます。カルロスにとっては、ラジオを聞くことだけが楽しみになりました。

病院にいる限り、マルシアの世話をする必要もありません。みんなが妹を見守ってくれています。カルロスは、お父さんがポータブルトイレを使う時や、決められた時間に体温を測ったりするのを手伝います。院内のコインランドリーへ行き、洗濯や乾燥もします。

入院してから二カ月ほどたった日。お父さんが、いつもとは違った話をしました。このころには、お父さんの病状はかなり悪化していました。お母さんも仕事を休んで、そばに付き添っています。お父さんは、すっかり痩せこけてしまいました。内臓の病気が悪いほうに向かっているらしいことを、カルロスはお母さんから聞かされました。

＊

　その日。

　お父さんが急に生き生きとした声を出して、これまで聞いたことのない話をし始めました。お父さんのベッドを囲うカーテンをすべて閉め切り、カルロスとお母さんはじっと耳を傾けています。

「朝、目を覚ますと、周りのものすべてが黄金色に光り輝く日が来るんだ。まばゆさに目を細めるほどの、光が全身を包む――」

　ここで、お父さんはいきなり、しゃがれ声になりました。

「わしら人間は、その日のために楽しい思いもし、時にはつらさや悲しみに耐えながら生きるんだ。神父様は、わしらがいつか天に昇り、そこで光に包まれると言うが、あれは嘘だ。ガテ様は、わしらは生きているうちに一度だけ、何もかもが光り輝く日を迎えるとおっしゃっている。その後は、誰にも分からない。ガテ様はそうおっしゃる。誰にも分からない」

　お父さんは、父さんのお祖父ちゃんの声で話している。カルロスは思いました。

　見ると、お父さんがほほ笑んでいます。カルロスとお母さんは、顔を見合わせました。入院して以来、お父さんがこんなにうれしそうな笑顔を見せたのは、初めてのことです。

　四方を白いカーテンで被った薄暗い中で、何か光るようなものを目にしたカルロスは、お父さんの顔に目を近づけました。しわの寄った老人のような顔。その目だけが、きらきら黄金色に輝いています。

　カルロスは、再びお母さんと目を合わせました。お母さんが硬い表情で大きくうなずきました。お母さんの目から涙がこぼれました。カルロスは、不思議に悲しいとは思いませんでした。お母さんには、あの黄金色の光は見えていない。きっと、あの光はお父さんからぼくへの贈り物だ。カルロスは、なぜかは分からないまま、そう確信しました。

　お母さんが立ち上がり、ナースコールボタンを押すのを、カルロスは静かに見守っていました。

ねえ、傘、貸して

＊

物語が始まる前に、みなさんにお願いがあります。このお話を読み終えたときに、タイトルの「ねえ、傘、貸して」を大きな声で言ってみてください。どうしてなのかは、お話のおわりに書きます。

＊

あいちゃんは、八歳で小学校の二年生。長女で、その下に、まいちゃん五歳、みいちゃん四歳の二人の妹がいます。

あいちゃんのお父さんは、大工さんをしています。からだがとても大きくて、授業参観日に教室のうしろで、クラスメートのお母さんやお父さんたちと並ぶと、目立ちます。

「あい、まい、みい、まいん」

お父さんは、夕ご飯のあとで、よくそんなふうに大声で歌うように叫びます。お酒に酔っているのです。

「よーし、もう一人、妹が来るようにすっからな」

酔ったお父さんが、三人の娘に言います。すると、お母さんが、「もう、いいですよ」と、必ず言い返します。そんなときの、お父さんとお母さんは、うれしそうです。だから、あいちゃん、まいちゃん、みいちゃんも、ほほ笑み、家の中が明るくなります。

「あい、まい、みい、まいん」

いつの間にか、お母さんを除くみんなで、節をつけて叫ぶようになりました。お母さんは、照れくさそうにして、にこにこしているだけです。

「まいんちゃんが、今度来る妹なの？」

　あるとき、あいちゃんは、お父さんにたずねました。

「そうだなあ。そのつもりなんだけど、弟かもしれないよ。それでも、まいんは、まいんだ」

「どうして？」

　あいちゃんが、そう聞いても、お父さんはにこにこしているだけです。お父さんの言うことは、あいちゃんには、わかるようで、わからないことが多いです。

＊

　あいちゃんのクラスに、愛（めぐむ）さんという男の子がいます。学校では、先生たちは児童たちを、男女の区別なく、さん付けにしています。愛さんは、よくからかわれます。名前が「あい」と読めるからです。あいちゃんには、自分の名前と同じ読み方ができる漢字の名前の男の子がいて、その子が「めぐむ」さんなのが、不思議でたまりません。

　どうして？

　愛さんには、お父さんがいません。亡くなったわけではないそうです。今は家にいないお父さんが、愛さんに愛という名前をつけてくれた。そんな話を、あいちゃんのお母さんと、愛さんのお母さんが話しているのを、あいちゃんは聞いたことがあります。お母さんたちは、仲がいいのです。

　愛さんのお父さんは、学校の先生らしいです。今は、あいちゃんと愛さんが住んでいる町にはいません。遠くに住んでいるようです。一か月に二度だけ、愛さんは、お父さんと会います。お父さんが、愛さんの家まで車でむかえに来てくれて、ドライブに連れて行ってくれるのです。

　その話を聞いたとき、あいちゃんは、うらやましいのと、悲しいのと、一緒になったような気持ちがしました。あいちゃんは、毎日お父さんと会えます。愛さんは、一か月

に二度しか、お父さんに会えません。

　どうして？

　愛さんは、どんな気持ちでお父さんと会う日を待っているのだろう。あいちゃんは、よくそんなことを考えます。愛さんのことが気になるのです。でも、学校では、あいちゃんは愛さんのそばに行くことはありません。名前のことで、からかうクラスメートたちがいるからです。

　いやだな――。

　あいちゃんと愛さんは、小学校に入学したときから、同じクラスです。初めて、クラスのみんなと顔を合わせた日のことを、あいちゃんはよく覚えています。

　先生が、男子女子に関係なく、あいうえお順で、名字（みょうじ）と名前を合わせて、さん付けにして呼んでいきました。名字と名前を呼ばれて、「はい」と元気に返事をして起立します。そして、「はじめまして」とおじぎをしながら言ったあと、時計の針と同じ向きにまわりながら、教室の中を見わたすのです。みんなに名前と顔を覚えてもらうためです。

　そのときです。先生が言いました。

「恵（めぐみ）あいさんと、相田愛（あいだめぐむ）さんって、何となく似ていない？」

　二人の名前は、先生の持っている名簿では離れています。愛さんの名前は、最初に呼ばれました。あいちゃんの名前が呼ばれたのは、だいぶたってからです。それなのに、「何となく似ている」と先生が言ったことが、あいちゃんには不思議でたまりませんでした。

　どうして？

　それからです。あいちゃんと愛さんが、みんなにからかわれるようになったのは――。

　元気のいいあいちゃんは、みんなの人気者になりました。元気のない愛さんは、みんな

からからかわれるようになりました。名前のことだけでなく、勉強のことや、運動のことや、いろんなことで、みんながからかうのです。あいちゃんには、それも不思議です。

どうして？

＊

愛さんは、一年生の時の夏休みが終わってから、学校をよく休むようになりました。先生が愛さんの家までむかえに行っても、学校に来なかったり、来ても保健室にいたりします。

どうして？

今、二年生のあいちゃんは、たくさんの漢字が読めるようになりました。学校の授業で習うというより、マンガを読んだり、ゲームをしていているうちに、自然に頭に入るのです。一つの漢字にいろいろな読み方があることも知りました。

クラスメートの中には、とても画数の多い、ややこしい漢字の名字や名前の人もいます。大人が正しく読めない漢字の名前の人も、何人かいます。

あいちゃんは、ひらがなだけの自分の名前が気に入っています。漢字の名前の人をうらやましいと思うこともありますが、ひらがなはやさしい感じがして好きです。漢字も、おもしろくて好きです。

二年生になった始業式の日のことを、あいちゃんはよく思い出します。

「あいだめぐむさん」

教室で朝礼のあとに、先生が名前を呼びましたが、返事はありませんでした。黒板には、席順を描いた画用紙が張られています。相田愛さんの席はあいちゃんの隣のはずなのに、相田愛さんはいません。

どうして？

そんなことを思い浮かべながら、愛さんが座っているはずの隣の席を見ていると、胸が熱くなってきました。

どうして？

二年生になって一か月がたとうとしているのに、愛さんは、ぜんぜん学校に来ません。保健室にいるという話も聞きません。引っ越したという話も聞きません。

ある日、昼休みが終わって、午後の授業が始まろうとしているとき、あいちゃんは、誰もいない隣の席にふと目をやりました。机に落書きがしてありました。△と｜を組み合わせた傘の絵が、描かれているのです。

｜をはさんで、右に「あい」、左に「愛」と書いてあります。細い鉛筆で描いてあるので、消そうと思えば消せるのですが、あいちゃんは、そのままにしておきました。

どうしてなんだろう？

落書きは、そのままにしてあります。

あいちゃんは、授業中に退屈になると、その傘の絵に目をやります。愛さんが毎日家にいるという噂を思い出します。外にはぜんぜん出ないらしいのです。ゲームでもしてるのかな。そんなことを考えながら、「愛」という漢字を見つめます。毎日のお掃除のたびに、机の上をふくせいか、絵も文字もだんだん薄くなってきています。

＊

ゴールデンウィークになりました。

連休のあいだに、愛さんの家に行こう。愛さんに会いに行こう。ゴールデンウィークが終わったら、毎朝、愛さんをむかえに行って、一緒に学校に行くのだ。隣の席に愛さんにいてほしい――。あいちゃんは、そう思いました。

でも、どうして、愛さんにいてほしいんだろう？

五月三日。

朝ご飯のあとに歯をみがきながら、あいちゃんは思いました。勇気を出して、きょうの午前中に、愛さんの家に行ってみよう。そう決心すると、体がほてってきました。

「お母さん、行って来まーす。まいんちゃん、行って来まーす」

お母さんのお腹の中にいる、妹か弟かまだわからない赤ちゃんにも、あいさつをしました。

空はくもっています。あいちゃんは、知らず知らずに駆け足になっていました。

汗が額から頬に流れてきます。途中で、はっと気がつきました。愛さんに会って、何を話したらいいのか、ぜんぜん考えていないのです。お土産も、持ってきていません。

愛さんのうちのドアが開いたら、何て言ったらいいんだろう。出てきたのが愛さんのお母さんなら、「愛さん、いますか？」かな。愛さんが出てきたら……。どうしよう？

とつぜん、ぱらぱらと大粒の雨が降ってきました。あいちゃんは、スピードをあげます。道路がぬれて、だんだん黒くなってきます。コツコツという靴の鳴る音も、湿ってきました。

そのうち、なぜ自分が走っているのか、どこへむかっているのかが、わからなくなってきました。走りながら、声に出して言いました。

どうして？

（おわり）

＊

みなさん、お話のおわりに「ねえ、傘、貸して」と元気な声で言ってくれましたか？
このタイトルが、あいちゃんが愛さんの家を訪ねたときに、あいちゃんが口にする言葉になるのです。

　みなさんの声で、きっとあいちゃんは「ああ、そうだ」と気づいてくれたことでしょう。雨が降ってきてよかったですね。

　みなさんの目にも、大粒の雨が見えましたか？　　二人は、教室の机に描かれた落書きのように、雨と傘のおかげで仲良しになれそうです。

（本当のおわり）

九つの命

＊

九つの命――アユ

　ずすーん、ぼほーん。

　川を段ボールの箱が流れて行きます。水びたしになった紙の箱が、だんだん沈んでいきます。

　ぼん。

　これは、段ボール箱が水面から突き出た大きな石に当たった音です。その大きな音を聞いたのは、一匹の子猫でした。

　お腹がすいた。喉がかわいた。どこかに飛んで行くような気持ちがする――。

　子猫は、気が遠くなり始めました。お母さん猫のお乳を飲んでから、もう三時間以上もたっているのです。

　段ボールは、堰せきに差し掛かろうとしています。そのまま進めば、滝の底に投げ込まれたように、ずぶ濡れの紙の箱は、ごぼーんと何メートルも下の水面に落っこちてしまうでしょう。箱の中には、九匹の子猫が座布団にくるまれています。二匹のお母さん猫が、それぞれ五匹と四匹の赤ちゃんを産んだのです。

　そのお母さん猫の飼い主の家には、全部で三匹の猫がいます。

「もう、猫はいらないよ」

「キャットフード代だけでも、馬鹿にならない」

「かわいそうだけど、前にやったように裏の川に流そう」

　飼い主の家では、そんなやりとりがあったのです。九匹のうち、今も意識があるのは一匹しかいません。でも、その最後の一匹も、お腹がすきすぎて、暗い眠りの中にさそわれそうになりかけています。

　堰の下では、釣りをしているおじいさんがいました。岡村次郎という名前で、二週間前に七十二歳になったばかりの人です。

「釣れんなあ。どうしてだろう」

　次郎さんは、ひとりごとを言いました。鮎を釣るつもりで張り切っていたのですが、ほかの魚は釣れても、鮎だけが糸の先の餌に食いついてくれないのです。

　ごどん。

　大きな音がしました。段ボールが堰の上のコンクリートにぶつかったのです。水を含んで重くなった段ボールが、ひっくり返りました。九匹の子猫のうち、箱の上のほうにいた三匹が飛び出しました。そのうちの、一匹が宙を飛びました。

　ぽぽーん。ほわーん。ぽたりんこん。

「なんだ、こりゃあ。いったい、何が入ったんだ」

　次郎さんは、腰に付けた魚籠（びく）にいきなり何かが飛び込んできたので、びっくりしました。

　以前に、猫を飼っていたことのある次郎さんは、子を産んだばかりの猫のいる知り合いの家へと、軽トラックを走らせました。そのお母さん猫は、とても気立てがやさしいのです。

　タオルにくるんだ弱々しい子猫をはげますために、調子はずれの声で一生懸命に子守唄を歌っています。

「ねーこーや、なぜなくの。ねーこーや、なぜなくの。ねーこーや――」

「七つの子」というカラスの歌を猫に当てはめて歌おうとしているのですが、焦ってしまって出だししか歌えないのです。仕方がないので、次郎さんは出だしのところだけを歌い続けます。

「ねーこーや、なぜなくの。ねーこーや、なぜなくの。ねーこーや、なぜなくの。ねーこーや……」

＊

軽トラックの助手席で籠に入れられタオルに包まれた一匹の子猫は、車の揺れをぼんやりと感じながら夢を見ました。

子猫は菜の花が咲き乱れる野原にいます。ぶるぶる震えていると、灰色をした年老いた猫が現れました。

「おまえの命を救ったのは、わしだ。おまえが、いちばん正直そうに見えたからだ。たぶん、このままでは、おまえもおまえのきょうだいたちのように、あの世に行くことになる」

そう言って、年老いた猫はいきなり、「あっくっしょん、ひくひく」とくしゃみをして、右の前足で鼻をこすりました。そして、再び話し始めました。

「わしは、もう年を取りすぎていて、おまえにこれ以上、手を貸すことはできない。あとは、次郎さんが、おまえを新しいお母さんのいるところへ、早く連れていってくれるかどうかにかかっている。ただ、次の約束をすれば、きっとおまえの命は助かるだろう」

おじいさん猫は、続けて次のような話をしました。

「おまえを含めて全部で九つの命を、おまえに預ける。ただ、預けるのはわしではなく、猫の神様だ。その九つの命を守るために、一生懸命に生きる気持ちさえあれば、必ず新

しいお母さんのところへ行き着くことができる。そのつもりがなければ、途中で、きょうだいたちと同じ運命をたどるだろう」

　ここで年老いた猫は、子猫の目をじっと見つめました。

「おまえは、生きたいかい？」と、年老いたが尋ねました。

「はい、生きたいです。せいいっぱい生きたいです」と、おじいさん猫の目を見て答えました。

　子猫は、新しいお母さんのいる家に引き取られました。乳離れをしたら、岡村さん夫妻の家で育てられる。そういう約束で里子に出されたのです。

＊

「ああ、よかった」

　家に帰るなり、次郎さんに妻の良恵さんが言いました。

「国道でクレーン車がひっくり返って、大事故になっているみたいよ。今、ラジオで速報が入ったの」

「そうか。だからサイレンの音がしたのか。帰り道は国道を通らなかった。何だか嫌な予感がしてね。虫の知らせっていうのかなあ。それはそうと、きょうは子猫が釣れたぞ」

　次郎さんは、子猫が「釣れた」時のもようを語りました。

「まあ、猫ちゃんが、うちに来るんですか。それは楽しみですね」

　話を聞き終えた良恵さんが、台所にもどりかけました。

「おや、足を引いているけど、どうかしたのか」

「階段を下りるときに、ついうっかり」

「気をつけろよ。うちの階段は、急で危ないからな。眼鏡の度が合わなくなってきたんじゃないかい。近いうちに視力検査を受けにいこう」

＊

夕食のテーブルに着いた次郎さんの顔色が変わりました。おかずが鮎の塩焼きだったのです。

「どうして、鮎なんだ」

「鮎釣りなんて、素人のあなたには無理ですよ。お魚を持って帰らないことは、初めから分かっていました」

良恵さんは笑いながら言いました。次郎さんは一瞬悔しそうな表情をしましたが、すぐにいつものやさしげな顔にもどりました。

「その代わり、かわいい子猫を釣ったぞ。どうだ、たいしたもんだろう」

次郎さんは、にこにこしながら得意そうに言いました。

＊

里子に出されているあいだに乳離れした子猫が、岡村夫妻の家にやってきました。

男の子です。子猫はアユと名付けられました。次郎さんが鮎の代わりに「釣った」からです。子猫は、自分の名前がすぐに気に入りました。

岡村家での最初の日、アユは再び菜の花の咲く野原の夢を見ました。

「よく頑張ったな」

あの年老いた猫の姿は見えず、声だけがします。

「どこにいるの、おじいさん」

「わしは、今、おまえのきょうだいたちと同じところにいる。静かで、きれいなところだよ。おまえも、来たいと思うかもしれないが、おまえには使命がある。約束は覚えているかい？」

「はい。でも、はっきりとは覚えていません」

「そうだろうな。あの時は生まれたばかりだったし、体がずいぶん弱っていたから――」

　アユは、自分を含めた九つの命が自分に託されていることを、もう一度聞かされました。おじいさん猫の声は、アユに猫の神様から与えられた使命について詳しく説明しました。

　岡村さん夫妻、松永ふささん九十二歳、小野田怜治さん五十四歳、清水ゆかりちゃん五歳、ゆかりちゃんが飼っているオカメインコのマーちゃん、山下悠太くん十三歳、松永ふささん宅の周辺に住む雄の野良猫。

　この八つの命と、アユ自身の命を見守る。場合によっては自分の命をかけて、ほかの八つの命を救う。そんな約束を、神様の代理だという年老いた猫とのあいだで確かめ合ったのです。

＊

　忙しい毎日が始まりました。アユは、のんびりと朝寝や昼寝をするわけにはいきません。なにしろ、八つの命を見守らなければならないのですから。

　アユには魔法が授けられていて、一瞬のうちに居場所を移動したり、遠くの出来事を知ることができます。ただし、その二つの魔法はそれぞれ一日に二回しか使えません。しかも、魔法を使ったあとには、体がひどく疲れるのです。

　でも、約束は約束。八つの命を守るのがアユのお仕事なのです。

　松永ふささんは、アユを自分が昔飼っていた雌猫だと思い込んでいます。アユは雌猫

の振りをして、松永さん宅を一日に何度か訪れ、松永さんの相手をします。

　一人暮らしの小野田怜治さんは、農業をいとなんでいます。体が丈夫ではないため、小野田さんが農作業をしていて危険な目にあいそうになるたびに、アユは魔法を使って助けなければなりません。

　清水ゆかりちゃんは生まれつき両足に障害があり、車椅子と歩行器を使って、毎日歩く練習をしています。小学校に上がるのを楽しみにしていて、苦しくても頑張っているのです。

　ゆかりちゃんとアユが初めて会ったとき、ゆかりちゃんは大騒ぎをしました。

「だいじょうぶだよ。ぼく、マーちゃんには何にもしないよ」

　アユの声を心で聞いたゆかりちゃんは、目を丸くしました。

「信じてもいいみたいだよ」と、オカメインコのマーちゃんが言います。

　ゆかりちゃんとマーちゃんは、心が通じていて会話ができます。そこにアユという新しい仲間が加わったのです。

　山下悠太くんは中学一年生なのですが、小学校五年生の九月からほとんど学校には通っていません。毎日、学校で授業をしている時間帯に外を歩きまわり、下校時間が過ぎると家に帰ってテレビを見るか、ゲームをしています。休日で外に児童や生徒がいるときにも、家にいてゲームをしたりテレビを見ています。

　悠太くんとアユは、公園で出会いました。実はアユがこっそりと悠太くんの後をつけて行き、悠太くんがひとりでブランコに乗っているところに近づいたのです。

「おい、ネコ。こっちに来い」

　アユは甘えた声を出して、相手の出方を見ました。悠太くんは、手に持っていたコンビニのビニール袋から、メロンパンを取り出し、一切れちぎってアユに投げつけました。パンは好きではありませんでしたが、アユは全部食べました。

「珍しいなあ。おまえの前世は人間だぞ。人間っていうのは、地球でいちばん偉そうな顔をしていて、前世が人間だったり来世も人間になるなんて信じているやつが多い。けど、そんなのは嘘だ。輪廻に生き物の差別はない。だから、ほかの生き物に比べれば、ほんの少ししかいない人間に生まれ変わる生き物は、めったにいないってわけだ」

悠太くんは、メロンパンの残りをちぎって口に放り込み、話を続けます。

「ちなみに、おれの前世はチャバネゴキブリ。あそこにいる女の人は、トノサマバッタだった。あの人の抱いている赤ちゃんは、シロサイだった。おれには、そういうことが全部分かるんだ。本当だぜ。信じるか？」

アユは、再び甘えた声で返事をしました。その日、瞬間移動を二回、千里眼も二回使い終えたあとです。くたびれているアユは眠くて仕方ありませんでしたが、目をしっかり開いて悠太くんの話を聞いていました。

ふだんの悠太くんは、両親と姉を含め、誰とも口をききませんが、気を許した相手には、実によくしゃべる子なのです。アユは、悠太くんにとっての数少ない、話の聞き手になりました。

松永ふささんの家の近くをテリトリーにしている野良猫の中に、ブーという雄猫がいます。ブーは正式な名前ではなく、鼻が極端に低いために、まわりの人間が与えたあだ名です。男の子のアユは松永さんの前では、松永さんが昔飼っていた雌猫を装っています。ブーは、アユをひと目見て好きになりました。

トカゲや野鳥をつかまえて、アユにプレゼントします。また、アユの目につくように、先回りして何げない振りをしながら、アユの前を通り過ぎたりします。

そうやって、なんとかアユに好かれようとするのですが、アユは気が進みません。照れくささもあって、ときどきブーはアユをわざとおどしたり意地悪をしますが、いざとなるとアユの魅力に負けて、ぼへぇーとした顔つきになり、すごすごと引き下がります。意外に照れ屋なのです。

＊

以上がアユの生活ぶりです。

年老いた猫を仲立ちにして、猫の神様とかわした約束を守るために、アユは忙しい毎日を送っているのです。

九つの命――みんな一緒に

三年後――。

わっせ、わっせ。

猫のアユは、忙しくて仕方ありません。猫は、しょっちゅう居眠りをしていていいなあ――。そんな猫のイメージとは、大違いの生活を送っています。

アユの飼い主の岡村さん夫妻、九十歳を過ぎた高齢者の松永ふささん、農業をしている小野田怜治さん、小学校に上がるのを楽しみにしている清水ゆかりちゃん、ゆかりちゃんのペット兼話友達のオカメインコのマーちゃん、学校に行こうとしない山下悠太くん、松永ふささん宅の近くをなわばりにしている雄の野良猫ブー。

この八つの命と、アユ自身の命を見守る。自分の命をかけて、その八つの命を救わなければならない時もあるかもしれない――。それが猫の神様とアユとの約束です。その証人となったのは、アユの命を助けてくれた年老いた猫でした。

アユには猫の神様から授かった不思議な力があります。瞬間移動と、遠くを見ることができる千里眼です。でも、その二つの力は、それぞれ一日に二回しか使えません。そのうえ、使った後には体がぐったりして、しばらく動けないことすらあります。

＊

ある日の午後。

　アユは、公園で悠太くんのお話を聞いていました。

「他人の前世について、あなたは誰々だったなんて言っているやつらがいるだろ。あれってインチキだ。人間が人間に生まれ変わる確率なんて、千兆分の一以下ぐらいしかない。人は、神様に選ばれてなんかいない。神様は、生き物の命で分け隔ては、いっさいしないんだ」

　悠太くんは同じような話を繰り返します。

　似た話ばかりを聞かされれば、たいてい誰もが退屈をして、もう相手にしなくなります。アユも退屈です。でも、アユは悠太くんの話の聞き手となって、じっとその話に耳を傾けます。あくびをこらえるコツも覚えました。

「――きのうの夜、テレビの番組で前世占いとかやっていたやつ。あいつは自分の前世が、江戸時代に生きていた偉い侍だとか言ってるけど、本当は明治時代に生きていたゾウリムシだったんだ。その前は室町時代のイボイノシシで、その前は――」

　そのとき、アユの頭の中に光が走りました。良くないしるしです。松永ふささんが、自宅の台所で仰向けに転ぶ姿が目に浮かびました。

　ちゃあー！

　その鳴き声とともに、アユは瞬間移動をしました。

「まただ――。あのネコ、また消えちゃった」と、つぶやいた悠太くんはブランコを降りて、話し相手のいなくなった公園を後にしました。

　松永ふささんは転倒したものの、後頭部の下にアユが滑りこんだために、腰を骨折するだけで済みました。それでも、九十歳を超えるお年寄りにとっては、大けがであることには変わりません。お医者さんは、仰向けに倒れて後頭部を打たなかったのは奇跡だと言いました。

　一方のアユは、数日間、前足だけで這いずり回っていました。痛い、痛いと心の中で

言いながら。

＊

アユが心配でならないのは、松永ふささんだけではありません。病弱なうえに、奥さんに先立たれて一人暮らしをしている小野田さんがいます。小野田さんには息子が一人いますが、結婚していて遠くの大きな都市で働いていているために、めったに帰省しません。

小野田さんは、田んぼの世話はお金を払って他人に任せ、自分は少しだけ野菜を栽培して生活しています。ぜん息という持病があるために、体調が不安定なのです。奥さんを亡くして以来、元気がなくなり、歩き方や動作が鈍くなったと、まわりの人たちは言い、それとなく気を配っています。

畑仕事中の転倒。ぜん息の発作で、たびたび喉を詰まらせる。ぜん息の薬の副作用でぼーっとしていて、軽トラックで事故を起こしそうになる。台所の火の始末を忘れる。野菜の出荷をしていて、刃物で手や腕を切りそうになる。こんな具合ですから、小野田さんからは目が離せないのです。

松永ふささんは、長期の入院をしなければならなくなりました。そのため、アユは時々そっと病院に忍び込んで、お見舞いをするだけになりました。雨が降って小野田さんが畑に出ていない日や、小野田さんが寝込んでいる日が、アユにとってはほっとできる時なのです。

アユの千里眼と、「ちゃあー！」という掛け声での瞬間移動は、主に松永ふささんと小野田さんのために使われている。そう言っても、いいでしょう。

＊

小学校入学を間近に控えた清水ゆかりちゃんは、車椅子と歩行器の使い方が、だいぶうまくなってきました。でも、うまくなった時にこそ、危険がともないます。頑張りすぎて、つい無理をしてしまうのです。

ゆかりちゃんの家の近くには坂道がたくさんあります。段差もあります。ある時、車椅子で坂を下りようとして、事故にあいそうになったことがありました。車椅子のブレーキが故障したのです。

アユが、ゆかりちゃんのペットでお友達の、オカメインコのマーちゃんと世間話をしていた最中でした。マーちゃんも、少しだけ千里眼ができます。

「あっ、ゆかりちゃんの様子が変だ。アユちゃん、わたしの代わりに見て来てくれる？」

マーちゃんが心配そうな顔でアユに言いました。

ちゃあー！

事情をすばやくキャッチしたアユは瞬間移動をして、坂をのぼってくる軽自動車に追突しようとしている車椅子に体当たりをしました。ゆかりちゃんの乗った車椅子は、路肩にぶつかってひっくり返りました。でも、ゆかりちゃんは、ぜんぜん泣きませんでした。

「ごめんなさい。ごめんなさい。悪かったのは、わたし。アユちゃん、マーちゃん、どうもありがとう、そして、ごめんなさい」

ゆかりちゃんは、ひたすら謝るばかりです。

腰を強く打ったアユは息をするのも苦しいほど痛かったけれど、「よかったね。事故にならなくて」と、声を振り絞ってささやきました。

＊

雄の野良猫ブーは、いつしかアユが男の子だということに気がつきました。でも、アユを見ると、ぼへぇーとした表情になり、やたら恥ずかしくなるのです。なぜなのかは、自分でも分からないみたいです。

ブーは、体も大きく力も強いのですが、犬にはかないません。

ある日、自分のテリトリーを越えて、アユの住む岡村夫妻の家の近くにまで来たことがありました。急に、アユの顔を見たくなったのです。

岡村さん宅の隣の隣の家には、高い塀をめぐらした大きな庭があり、そこに三頭のポインター犬が放し飼いにされています。ポインターは、大きくて鼻のきく猟犬です。鼻が悪くて匂いを嗅ぐのが苦手なブーは、うっかりその庭に入りこんでしまいました。

アユのことを考えていたために、ぼへぇーとした状態で油断をしていたブーは、三頭の猟犬にすぐに見つかってしましました。ブーは高い塀によじのぼろうと必死で逃げましたが、途中で自分が塀とは逆の方へと走っているのに気がつきました。

しまった！

ブーは、その家の納屋に追い込まれてしまいました。納屋には、出入口は一つしかありません。牙をむいたポインターたちが、今にも納屋に入ろうとしています。

ちゃあー！

納屋に奥で身を縮めていたブーは、恐ろしさのあまり目をつむりました。

きゃいんきゃいん、くしゅんくしゅん……。

何だろう。どうしたのだろう。ポインターたちの悲鳴が聞こえてきます。ブーは、そっと目を開けました。

納屋の出入り口の外で、三頭のポインターたちが、鼻を地面に押し付けたり、ひっくり返っています。ブーはあわてて納屋の出入り口から抜け出し、一目散に逃げ出しました。この家の庭を囲む高い塀の上に駆け上がったブーは、ふうふう息をしながら振り返りました。

ブーは驚きました。さっきまでいた納屋の屋根にアユがぐったりと横たわっているのです。一方、三頭のポインターたちは、納屋の前でまだ大騒ぎをしています。そのかたわらに、蓋が取れたコショウの瓶が転がっています。どうやら、犬たちは納屋の上から落ちて来たコショウをまともに浴びたようなのです。

　驚いたのは、ブーだけではありません。この家の隣の隣にある岡村さん宅では、台所で良恵さんがコショウの入った瓶を探していました。「どこに置き忘れたのかしら。コショウがない。それに、さっきまで、そこでおとなしくキャットフードを食べていたアユがいないし――」

　きゃいんきゃいん、くしゅんくしゅん、ぶほっぶほっ……。

　ポインターの大騒ぎはおさまりません。鼻がきくだけに、コショウが鼻にずきりと来るのです。鼻の奥が痒いどころか痛くて仕方ない様子で、さかんに地面に鼻をこすり付けています。

　瞬間移動をしたばかりで疲れきったアユは、納屋の屋根の上で体を休めていました。よかった。間に合った――。アユはほっとしています。そのとき、庭を隔ててアユとブーの目が合いました。

　それ以来、ブーはアユに対して、ぼへぇーをやめ、アユを尊敬するようになりました。アユの子分になると勝手に宣言したのです。丁重に断るアユに向かって、「では、アユ様のボディーガードになります」と、ブーはこれまた勝手に宣言しました。

＊

　ある夜――。

　アユは夢を見ました。

「アユ、聞こえるか」と、あの年老いた猫のかすれた声がしました。

「おじいさん」

　アユは久しぶりに聞く声の主を探しましたが、姿は見えません。

「アユよ、おまえが、毎日、一生懸命にやってくれていて、わしも鼻が高い。神様の前で、おまえを推薦した甲斐がある」

　それを聞いて、アユはうれしくなりました。

　年老いた猫は意外な話をし始めました。アユを含む九つの命には、ある共通点があるというのです。

　興味津々のアユは黙って耳を傾けました。声は、ときおり、むんぐむんぐと口ごもって聞き取りにくくなります。話しにくい内容を口にしているからだけでなく、歯がところどころ欠けているからです。なにしろ、その年老いた猫は、人間の年齢でいうと百二十歳で、神様に召されたのでした。

「難しい話をするが、質問はしないで聞いてくれ。むんぐむんぐ」と断り、ごほっと咳払いを一つしたのちに、再び声が聞こえてきました。

「いいかい。本当は猫の神様も、犬の神様も、人間の神様も、草木の神様も区別はないんだ。神様は無数にいる。神様は、無数のものにとっての神様なのだ。神様は、無数の命の一つひとつにとっての神様だということらしい。だから、神様は一人だとも言えるし、無数だとも言える。むんぐむんぐ――」

　ここで、年老いた猫の声は少し聞き取りにくくなりました。でも、すぐに長い話が続きました。

「最近、天にいる無数の命たちのうちの一つから、こんな話を聞いた。天にいる命たちは待機中なんだそうだ。わしも自分がもう猫ではないことは薄々感じていたんだが、どうやら命は形を変えるらしい。そして、いつかここから下りる時が来るという。それがいつになるかは、神様にも分からない。むんぐむんぐ、ごほっ――」

　少し沈黙が続きました。アユは耳をそばだてて、声の聞こえてくる空を見上げました。空には数えきれないほどの星が輝いています。アユには、その星たちが、年老いた猫の言った無数の神様のように思えました。

「――ええっと。何を話していたのだっけ……。そうそう、待機中の命たちの話だ。で、その命たちだが、天に昇ってから五十年目、百年目、何百年目なんてざらだという。千

年も待っている命もあるという噂だ。ここはいいところだから不自由はない。退屈すれば眠ればいい。ちょっと居眠りをするだけでも、十年や二十年はあっという間に過ぎてしまうそうだ。わしは、おまえに話さなければならないことがあるから、まだ寝入ったことはないが、そろそろ一眠りしようかと思っている」

　そこから、アユを含めた九つの命の話になりました。年老いた猫の声によると、九つの命は同時に、この世からあの世へと飛び立つ運命にあるというのです。それは、神様にもどうしようもない、宇宙の決まりなのだというのです。

「覚えているかい。おまえは、川を流れる段ボール箱に入っていた九つの命のうちの一つだった。ほかの八つの命は、あの日、天に昇ったんだ。あの子たちはなあ、死なずに済んだんだが――」

　ここで、年老いた猫は声をつまらせました。

「――生き続けるか死ぬかは、ちょっとしたはずみで決まるらしい。おまえは生まれたばかりだったから知るわけはないが、あの日、命を救われた八つの命がほかにもあったのだ」

　そのことは、アユには何となく分かりましたが、黙って声に聞き入りました。

「分かったみたいだな。そうだよ。やっぱり、頭がいい子だなあ。わしが見込んで、神様からの使命を託しただけのことはある。それに、思ったとおりの正直な子でよかった。おまえは、年を取ったわしの代わりに、神様との約束をちゃんと果たしてくれた」

「おじいさん、ごめんなさい。ぼくには、さっきおじいさんのおっしゃった、神様や天にいる命たちのお話がよく分かりませんでした」

「いや、別に分かる必要はない。おまえに悪いところはない。誰であれ、何であれ、生きているものたちに悪いところはない。それが宇宙なんだそうだ。わしも、よくは知らない。神様から教えていただいたお話や、天で聞いた噂話を、こうして伝えているだけだ。ただし、これからする話だけは覚えておいてほしい。約束してくれるか」

「はい、約束します」と、アユは返事をしました。

「あの日、この町で、おまえを含む九つの命が救われた。命拾いをしたと感じた者もいれば、自分の命が救われたことにぜんぜん気づかなかった者もいるそうだ。それも、良い悪いの問題ではない」

「ごめんなさい。ぼくにはたった今おじいさんがおっしゃったことの意味が分かりません」

「良い悪いの問題ではないってことかい？」

「はい」

「そのことは分からなくてもいいから、これから言うことをよく聞いてほしい。九つの命のうち、一つは鳥、二つは猫、六つは人間だった。この世に命がある時は限られている。神様にも分からない規則のようなものがあって、それが、あの日にこの町で救われた九つの命が天に昇る日を決めたらしい。期限付きというやつさ。それだけのことだ。むんぐむんぐ」

　そう言い残して声は消え、アユはいつもの眠りに落ちました。

＊

　夢の翌日、アユたちの住む町の周辺を、記録的な降水量の集中豪雨が襲いました。草木、動物、昆虫、微生物……。たくさんの命の期限が切れました。その中には、次の九つの命も含まれていました。

　岡村次郎、七十五歳。岡村良恵、七十一歳。松永ふさ、九十五歳。小野田怜治、五十七歳。清水ゆかり、八歳。マーちゃん、四年八か月。山下悠太、十五歳。ブー、七年二か月。アユ、二年十一か月。

＊

　ふわりんこ、ふわりんこ。

九つの命が身を寄せ合い薄いピンクのかたまりとなって、空へと昇っていきます。

ひょっこら、ひょっこら。

雲の階段を次々と飛び越しながら、スキップを踏むように、天へと向かっていきます。

九つのうちの一つが、横を見ると、やはり淡いピンクの気体に包まれたいろいろな形のものが、かたまって浮かんでいるのが雲の間に見えました。その向こうにも、また、その向こうにも――。

ふわりんこ、ふわりんこ。ひょっこら、ひょっこら。ふわりんこ、ふわりんこ。ひょっこら、ひょっこら。

（おわり）

ねえ、傘、貸して

著　　星野廉

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社